



2008.1.1

最初の漢訳「ドン・キホーテ」……樽本照雄 1
 《哲理小説 哲學之禍》の原作……渡辺浩司 7
 近代小説家張毅漢生平續考 ………郭 浩帆12
 網羅精英 任人唯才 ………張 英17
 狄平子小説資料一則 ………武 禧20
 晩清小説作者掃描(拾叁) ………武 禧21
 蔡元培を中傷した北京大学元教員…樽本照雄23
 清末小説から26 本年もよろしくおねがしいた
 します。樽本『林紓冤罪事件簿』を発行しまし
 た。五四時期の林紓が文学史でどのように説明
 されているか。林紓は悪役そのものです。例外
 がありません。問題はのちの文学史家のほう罫

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

最初の漢訳「ドン・キホーテ」

樽 本 照 雄

セルバンテス著「ドン・キホーテ」最初の漢訳については、これが誤解にまみれている。こう書くのは、中国の研究者を批判するためではない。誤解のないようをお願いしたい。一度定まった言説は、容易に訂正されない例として見ていただければよろしいかと思う。

定説は林訳『魔侠传』

たとえば、杜漸「唐・吉訶德的武士英魂」(『書海夜航』二集 北京・生活・読書・新知三聯書店1984.7。15頁)に次のような説明がある。

ドン・キホーテというこの名著は中国の読者には見なれないものではない。はやくは1922年に、中国には林琴南が訳述した省略本『魔侠传』があり、のちに商務印書館がさらに任実の省略本を出したことがある。1937年になって^{ママ}傅東華が上冊を翻訳し終わり、1959年ようやく下冊を訳して完全な漢訳本がついに出版された。

杜漸が書くように、「ドン・キホーテ」の

漢訳は、林紘+陳家麟訳『魔侠传』(1922)が最初であると信じられている。

『魔侠传』が、英語からの重訳で、原作前後編のうち前編部分のみであることなど、一般には知らなくてもいいという判断かもしれない。任実版については不詳。目録の記載によると、賀玉波訳(開明書店1931)、蒋瑞青訳(世界書局1933)、汪倜然編著(新生命書局1934)、温志達訳(啓明書局1937)、傅東華訳(商務印書館1939)、范泉要約[縮写](永祥印書局1948)などが出版されているらしい。「吉訶徳先生」「唐吉訶徳」などの類似する書名が多い。林訳の『魔侠传』とは違って原音に近いことができる。それらのほとんどは、英訳からの重訳であって省略本だという(『魔侠传』を除く以上の諸版は、私はいずれも見えていない)。

また、林煌天主編『中国翻訳詞典』(武漢・湖北教育出版社1997.11。571頁)は次のように解説する。

『ドン・キホーテ』は早くから翻訳され中国に紹介されている。1922年2月^{ママ}商務印書館が、林紘と陳家麟が英訳本から重訳した最初の漢訳本を出版した。書名を『魔侠传』といい、該館が出版していた「万有文庫」叢書に収録されている。

この項目を執筆した人は、『魔侠传』の原本を確認していないのかと疑う。出版年月を間違っている。また、「万有文庫」に収録されたのは1933年であって、最初

に収録されたのは「説部叢書」第4集第18編なのだ。

専門の事典でありながら誤記がある。ということは、『魔侠传』2冊本は、すでに見ることが困難なのであろうか。

すべてをあげることはできない。翻訳についての専門書を示せば、それで十分だろう。

謝天振、查明建主編『中国現代翻訳文学史(1898-1949)』(上海外語教育出版社2004.9。562頁)も同様に『魔侠传』が中国で最初の翻訳だと説明している*1。

もうひとつ、漢訳「ドン・キホーテ」の解説を紹介しておく。(西)塞万提斯(M.D.CERVANTES)著、董燕生訳『堂吉訶徳』(武漢・湖北長江出版集団、長江文藝出版社2006.7)である。大判で全853頁もあり、巨著というのがふさわしい。

趙振江が「永恒的《堂吉訶徳》及其在中国的传播(訳本前言一)」(2頁)において外国語を理解しない林紘が、英語を理解する陳家麟の口述翻訳にもとづき1922年に『魔侠传』を訳したとのべる。

しかも同書では、林一安が「深刻理解 精確翻訳(訳本前言二)」(11頁)で最初の漢訳は林紘だと同じことを書いている。

そればかりか、翻訳をした董燕生までもが「呼喚堂吉訶徳归来」(845頁)の中で「早期の林紘の文言本『魔侠传』」だと説明する。

スペイン語を専攻した専門家たちではあっても、自国の「ドン・キホーテ」翻訳史にはくわしくないということになる。誤解しないでほしいのは、中国語翻訳そ



稽先生傳

Don Ruisote

被 褐

血海花魂記。因作者染恙。尙未脫稿。本期特廣刊此篇。以餽閱者。是文爲西文中。最著名之作。被褐先生。又以樸茂淋漓之筆。譯之。爲自有譯本。小說以來。所未有。閱者。幸勿忽視。

▲譯西班牙奎望之集 *Mauslated from Servantes Inlyros*

第一章

蒙。豈。moncha 之國有負村而居者。嘗騎羸馬。曳長矛。挾古。驅鷄。毛之狗。游行郊野。間日。噉肥牛。而未嘗見羊肉。(西班牙俗。羊肉貴而牛肉賤) 數夕而一具肉。蔽五日。而一食扁豆。七日。而烹一鷄。錦。鬪之袍。絨之履。以待。謙日。家。紆之。翼。以爲。相服。一老婢。一女。侄。與居。一僕。能跨馬。負長。鏢。以供。除。田野之役。主人。爲人。膾。面。而。瘠。身。神。王。而。氣。滿。好。騎。馬。射。獵。年。且。五。十。矣。世。所。謂。稽。叔。先。

小 說

生者也。往之談者。每好舉其遺事。特談論。恣異。聽者。至。察。耳。張。目。動。魂。醉。心。失。笑。而。不。可。仰。蓋。稽。叔。自。少。壯。不。事。事。好。讀。書。大。喜。誦。游。俠。之。傳。記。人。間。之。樂。莫。能。身。之。審。其。土。地。以。買。書。遺。棄。世。務。游。神。廣。漠。之。野。夷。然。自。得。尤。篤。嗜。西。華。Feliciana a Sylvia 集。以。爲。文。章。之。珍。璧。也。西。華。善。爲。愛。戀。之。書。辭。多。艱。難。與。誦。不。可。解。雖。起。亞。里。士。多。德。於。九。泉。而。問。之。嘿。如。也。稽。叔。好。讀。之。往。往。心。脈。電。明。醋。發。於。腦。弗。能。舍。稽。叔。既。敵。其。神。明。日。夜。以。讀。奇。怪。不。經。之。書。久。之。乃。發。爲。異。想。出。於。其。書。而。入。於。其。腦。舉。人。間。妖。幻。狂。癡。毒。亂。乖。刺。悲。愁。創。痛。怨。潰。苦。惱。荒。唐。之。感。紛。然。來。襲。自。惟。其。書。所。紀。皆。真。實。也。喟。然。慕。之。曰。西。特。魯。諦。cid Ruydiaz 壯。大。也。然。不。可。以。敵。火。劍。候。Knights fo Burinus sword 火。劍。候。誓。一。舉。臂。而。碎。二。巨。靈。之。骨。斯。足。多。哉。後。慕。迦。比。阿。Bernardo del Carpio 迦。比。阿。殺。妖。魔。阿。倫。多。Oratudo 於。龍。師。瓦。Roncesvalles 逐。之。於。大。地。而。殺。之。於。空。氣。之。中。如。海。枯。兒。Hercules 殺。安。多。avaeus 故。兒。者。也。(海。枯。兒。者。希。羅。式。勇。之。師。安。多。者。女。神。築。zaea 之。子。稱。王。於。里。西。伯。Hya 海。枯。兒。刺。殺。之) 又。好。稱。異。人。馬。靜。德。margante 馬。靜。德。者。以。

のものについて私は知っているのではないことだ。林訳『魔侠传』が「ドン・キホーテ」の最初の漢訳であるという誤解が広く長く信じられているという事実を指摘しているにすぎない。

念のために定説をくりかえす。セルバンテス「ドン・キホーテ」の最初の漢訳作品は、林紘+陳家麟が英訳本から重訳した『魔侠传』2冊である。商務印書館1922年3月発行の「説部叢書」第4集第18編に収録されている。

だが、この定説は間違っている。

林訳よりも9年も早く「ドン・キホーテ」の漢訳は公表されているのだ。

被褐訳「稽先生伝 [ドン・キホーテ]」

雑誌に掲載された漢訳だ。ゆえに、単行本を中心として収録した書目には出てこない。また、部分訳であることも翻訳史から見落とされる原因となったものか。忘れられた理由としては、これくらいしか考えつかない。

表示すれば次のようになる。

(西班牙) 率望^{ママ} Servantes 著、被褐訳「稽先生伝(Don^{ママ} Ruisote^{ママ})」第1、2章『独立周報』第2年第7-8号(第21-22期)1913.2.23-3.2

2章のみの翻訳だ。上記以外は見ていない。「ママ」とつけておいたが、CervantesのDon Quixoteであることはいうまでもないだろう。

前文に、該誌に連載していた「血海花魂記」(天无生(王无生)著)が穴を開けた

のでその埋め合わせであると説明されている。

つづけてある説明の英語が誤植だらけ。校正するという習慣は、当時なかったのだろうか。「訳西班牙率望之集 Mavslated from Servantes Inl.y19.05」と表示される。英語部分は、Translated from Cervantes July 1905 だろう。1905年7月発行の英語版にもとづいていると判断する。ただし、英訳者などの詳細については記述がない。誤植が多いとはいえ、1905年の刊行だと書いてある。英訳本を特定するばあいは、とりあえずこれが手がかりになる。

今、私の手元にある英訳本は、エブリマンス・ライブラリ版など数種類にすぎない。先に断わっておきたい。1905年に該当する版本は、今回入手できなかった。

訳者について触れておく。

被褐は馬浮

訳者被褐の本名は、馬浮である。

馬浮(1883-1967)、浙江紹興の人。幼名福田、字一浮など。被褐は号。挙人。1901年、馬君武らと上海で『翻訳世界』を営する。1903年、アメリカへ行き、1904年帰国。その後、日本へ赴き日本語とドイツ語を学習した。帰国後は『独立周報』に投稿し、のち杭州に蟄居する。書道に造詣が深い。浙江大学教授、復性書院院長、浙江文史研究館館長、中央文史館副館長などを歴任した*2。

彼の著作目録を見れば、哲学思想関係の著作を多く出している。アメリカから日本に行ったとき、マルクスの『資本

論』を2部持っていた。英訳本は謝無量に送り、もう1冊のドイツ語版は自分で読んで中国に持ち帰ったという。これが1904年のことだ。社会科学関係の翻訳を多くしている馬浮にしてみれば、「ドン・キホーテ」の漢訳は珍しい部類にはいる。

ただ、1905年に中国帰国後、「ドン・キホーテ」を英語本から翻訳したのはいいが、そのまま上海『独立周報』に掲載したことになる。馬鏡泉編校『中国現代学術経典 馬一浮卷』(石家荘・河北教育出版社1996.8。746頁)および馬鏡泉編『馬一浮学術文化隨筆』(北京・中国青年出版社1999.1。317頁)にそうある。同一編者だから、記述も同じだ。しかし、漢訳の掲載は上に示したように『独立周報』第2年第7-8号(第21-22期)すなわち1913年2月23日から3月2日だ。馬の勘違いだろう。

漢訳の底本は不明

馬浮漢訳の「ドン・キホーテ」は、固有名詞を英語で補いながら、古文で翻訳している。固有名詞の綴りから版本を特定できるのではないかと考えた。だが、英語そのものが誤植していたりして、残念ながら今回それには成功しなかった。

冒頭部分を掲げる(句点は樽本)。

【馬浮】蒙豈 moncha 之国有負村而居者。嘗騎羸馬。曳長矛挾古楯。驅黝毛之狗。遊行郊野間。日噉肥牛而未嘗見羊肉(西班牙俗羊肉貴而牛肉賤)。数夕而一具肉獻。五日而一食扁

豆。七日而烹一鵠。錦罽之袍毳絨之禪。毛織之履以待讌日。家絰之襲以為袒服。

マンチャの国で村の近くに住んでいる者がいた。痩せ馬にまたがり、長矛を引きずり古楯をたばさみ、黒毛の犬を追い立て野原を行進していた。昼は牛を食い羊肉を見たことがない(スペインでは羊肉が高価で牛肉は安い)。たいていの夜には挽肉だったし、金曜日はインゲン豆を食べ、日曜日にはハトを調理した。ラシャの上着ピロードのズボンは祭日用に、手織りの着物を下着にしていた。

五十歳になるその人物の名前は、キホーテ氏(稽叔先生)という。

ラ・マンチャをマンチャにしてしまった。当時のスペインでは羊肉が牛肉よりも高価であったことを説明している。英訳にそうする版本があるからだ。

馬浮は、ドン・キホーテの食事の習慣、衣服については翻訳している。しかし、ラ・マンチャ、あるいは彼の収入の割合は無視した。参考までに林紓らの漢訳を示す。

【林訳】在拉曼又中。有一村莊。莊名可勿叙矣。其地半拋亞拉更。半拋卡司提落。莊中有守旧之故家。其人好用矛及盾。与駿馬獵犬。二者皆旧時之兵械。其人尚古。故用之不去手。食多用牛而屏羊。且食品。排日而定。不相淆混。歲入非少。然以劃其四分

之三。耗之食品。餘其一。則用以製衣。衣恒用絨。下裳及履。無一不絨。家居則用自織之布。

ラ・マンチャに、ある村があったが、その名前はいいたくない。そこは、半ばがアラゴンに半ばはカスティーリヤに接している。村に旧習を守った旧家があった。その人は矛と盾、駿馬と獵犬を好んで用いていた。そのふたつともに昔の武器である。古を尊んだがゆえにそれを手から放そうともしない。多くは牛を食し羊を排除した。献立は日によって定まっており乱れることはない。収入は少ないというわけではないが、4分の3は食品に消えた。のこりは、衣裳を作るのに使った。衣は常にピロードを用い、ズボンとクツもピロードでないものはない。家にいるときは、手織りの布を使った。

馬浮と林訳を合わせると、ほぼ原文のようになる。つまり、それぞれが英訳原本を取捨選択して漢訳していることがわかるのだ。

そこで結論である。

漢訳最初の「ドン・キホーテ」は、馬浮の手になる。雑誌『独立週報』の掲載は、1913年だ。林紓+陳家麟訳『魔侠传』(1922)よりも9年もさかのぼる。ただし、2章だけにすぎなかった。 罫

【注】

1) 查明建、謝天振『中国20世紀外国文

学翻訳史』上巻(武漢・湖北教育出版社2007.2。289頁)も同じ。こちらでは、周作人が「ドン・キホーテ」の一部を翻訳したことになっている。「《魔侠传》選録」と題して『小説月報』第16巻第1号1925に発表していると説明する。正しくない。周作人が以前に発表した『魔侠传』についての文章を抄録したもの。たぶん該号の目次に「「魔侠传」選録」とあるのを見ただけで周が独自に翻訳したと勘違いしたのだろう。「選録」とは、以前の文章を「選録」したという意味。原文を読めば、「「魔侠传」」としか表示していない。

2) 徐友春主編『民国人物大辞典』石家莊・河北人民出版社1991.5。670頁による。間違いは正した。

『清末小説』第30号

林訳シェイクスピア冤罪事件.....樽本照雄
《月月小説》掲載の翻訳小説の原作
.....渡辺浩司
周作人漢訳アリ・パバ「侠女奴」の英文原本
.....樽本照雄
敘事與重複：《老殘遊記》的研究.....黎 活仁
一個“走方郎中”的醫藥筆墨.....劉 德隆
劉鶚的祖居及寓所小考.....劉 德樞
邵振華及其《俠義佳人》.....黄 錦珠
商務印書館《最新教科書》日本校訂人署名及
其他張 鳳
李伯元遺稿(9) 李錫奇『南亭回憶錄』
より

《哲理小説 哲學之禍》の原作

渡辺浩司

の作者と言え、言わずと知れたMaurice Leblanc (フランス, 1864-1961) である。

現在わかっている限りでは、彼の作品が中国語訳されたのは、民国になってからで、やはりルパンものが最初のものである。ルパンものについては、先行論文があるので、そちらに譲ることとし、本稿では、ルパンものではない彼の作品で、民国初頭に小説雑誌に掲載された《哲理小説 哲學之禍》の原作が判明したので報告する。

先に、民国初期のMaurice Leblanc の中国語翻訳作品を『新編増補清末民初小説目録』(樽本照雄編, 齊魯書社2002.4)によって抽出してみると、以下のようなになる(全集・選集は除く)。

1 .

前号掲載の拙稿で《亞森羅蘋之勁敵》及び《竊鐘案》の原作を明らかにし、それがルパン・パステッシュであることも述べた。ところで、ルパン(Arsène Lupin)

	作品名	訳者	原作等
01.b0066-069	八一三	卓呆、天笑	813,
02.b0299-300	宝石項圍	塵夢	Le Collier de La Reine,
03.d0010	大宝魔王	天笑生	The Hollow Needle (L'Aiguille Creuse)
04.f0451	福爾摩斯別伝	周瘦鵑	ホームズとルパンとの対決,
05.f0482	福爾摩斯之勁敵	心一	Sherlock Holmes Arrive Trop Tard,
06.h1027	虎口	周瘦鵑	Les Dents du Tigre,
07.k0159	空針	周瘦鵑	L'Aiguille Creuse,
08.q0994	肱篋之王	周瘦鵑	Arsène Lupin Gentleman Cambrioleur,
09.s1179	双雄闘智録	周瘦鵑	Arsène Lupin Contre Herlock Sholmès,
10.s1239-241	水晶瓶塞	常覚、覚迷	Le Bouchon de Cristal,
11.t0278	天外飛鴻記	屏周、瘦鵑	
12.w0149	網中魚之亜森羅蘋	屏周、瘦鵑	書名にルパン
13.w0200	偽親王	嘯雯	
14.y0039	亜森羅蘋之妻	瘦鵑	書名にルパン
15.y0041-042	亜森羅苹失敗史	屏周、瘦鵑	書名にルパン
16.y0045-046	亜森羅苹之失敗	屏周、瘦鵑	L'Arrestation d'Arsène Lupin,

17.y1173-175	猶太燈	周瘦鵑	ルパンとホームズとの対決
18.z0241	哲学之禍	屏周、瘦鵑	
19.z0307-308	偵探家之亜森羅莘	屏周、瘦鵑	書名にルパン

右欄の数字は以下の論考・目録に言及されていることを表す。

中村忠行「清末探偵小説史稿(三・完)」『清末小説研究』4(清末小説研究会1980.12.1)

大塚秀高「清末民初探偵小説管窺」『清末小説から』64(清末小説研究会2002.1.1)

樽本照雄「漢訳コナン・ドイル小説目録」『漢訳ホームズ論集』(樽本照雄著,汲古書院2006.9)

この中で、書名にルパンが使われている作品や先行論文でルパンものとの指摘がある作品を除くと、《天外飛鴻記》、《偽親王》、《哲学之禍》の3作が残る。そのうち、《天外飛鴻記》は、実見したところ、原作は『L'Évasion d'Arsène Lupin』であった。すなわち、不明の《偽親王》を除いて、Leblanc作品の中国語訳と言えば、上記のようにほとんどがルパンものである。それだけに、ルパンものではない作品《哲学之禍》は、その存在自体が興味深いと言える。

2.

簡単に紹介すると、まず書名は《哲理小説 哲学之禍》。書名の下に、“法國瑪黎瑟勒勃朗原著”とあり、“瑪黎瑟勒勃朗”が、Maurice Leblancの中国語訳である。その下に訳者“屏周”、“瘦鵑”が書かれている。“屏周”については不明。上表に見られるようにルパンものを“瘦鵑”と共に訳している。その“瘦鵑”は周瘦鵑で、原籍は江蘇呉県、1895年上海生まれ、1968年没、作家・翻訳家・雑誌編集者として活躍した。掲載誌は《中華小説界》第二巻第六号(編輯兼発行者:中華小説界社、

總發行所:中華書局,1915年6月1日出版)である。

さて、この《哲学之禍》の原作は、Maurice Leblanc『L'Homme qui se souvient』である。Maurice Leblancの作品について、非常に詳細に調査しているペレンナ管理ホームページ「怪盗紳士アルセーヌ・ルパン」によると、初出は、『Je sais tout』誌73号(1911.2.15)で、後に、短篇集『La Robe d'écaillés roses』(Lafitte,1912.8)に収められた。^{*1}

なお、この作品は、日本語にも翻訳されており、岡田良恵訳『記憶のある男』として、長島良三編『フランス怪奇小説集』(偕成社1988.8)に収められている。以下に示す日本語訳はすべてここから引用した。

あらすじを紹介する。

私(弁護士)は列車内である男に出会う。その男(Justinien Roc)は声をかけてきて、再会のあいさつをしてくる。彼は、以前会った時も現在と全く同じ状況だったと話し、私も思い出せないまま話を合わせた。途中、別の男が乗車してくる。Rocはしばらくすると、その男に対しても、

私の時と同様に、再会のあいさつを始めた。しかし、その男はこの路線は初めて乗ったと言ひ、相手にしなかつた。私はRocと名刺を交わし、マルセイユで下車し、入れ替わりに二人乗車してきた。

翌日、新聞に列車内殺人事件の記事があり、被害者は三人、犯人として逮捕されたのはなんとRocだった。Rocは弁護人に私を指名し、独房内で面会した。だが、Rocとは事件についての話はできず、裁判では死刑の判決が下された。

死刑執行の前日、私はRocと面会した。その時、Rocは自分の半生を語り始めた；人間の心に興味を持ち、大学の哲学科に入り、教師からの刺激を受けたこともあり、心理現象について熱心に研究していた。そして、あることを体験した瞬間に、そのことは過去に体験済みであると意識してしまうという自分の心理現象を発見する。両親との死別により、その現象は更に進展する。婚約相手から一方的に破談を告げられ、涙を流して口論している途中、はたとこのショックも体験済みだと認識し、この心理現象は自分の前世の記憶なのだと確信する。神により、人間はすべて生まれ変わるのであるが、生まれ変わっても同じことを与えられる。神はそれを通して、人間をよりよくしようとしているのだが、人間にとっては、前世の記憶はほとんど残っていないので、それに気付かない。しかし、私はこの神の秘密を知ったため、すべての体験 - それをもたらす感情も含めて - について、瞬時に前世の記憶を思い出してしまう。



つまり、生活のすべてにおいて、新しいことが全くないのである。私はこの恐ろしい繰り返しから逃れるために、初めての感覚を求めて旅をした。そして、とうとう殺人を犯すまでに至ったのだが、殺人も二回目だった。

死刑の当日、Rocの悲痛な様子から、彼が断頭台に上るのもやはり二回目だったことを、私は理解し、思い出す。

このあと、語り手の弁護士にも伝染しそうな、不気味な物語である。

翻訳の出来について見ておく。主人公のJustinien Rocが“石喬士”となっている。これはもちろんRocが意識で中国風に“石”となり、Justinienが音訳で“喬士”となったのであろう。内容の方は、

フランス語原文から訳されたとして話を進めると、白話訳で省略と誤りが少し見られる。

例えば、Rocが逮捕され、「私」が初めて面会に行った時の以下の興味深い描写は残念ながら省略されてしまっている。

Ce n'est pas, je l'avoue, sans un certain émoi, et non plus sans une répulsion violente, que je pénétrai dans la cellule de M. Roc, l'abominable meurtrier. Assis au bord de son lit, il regardait de son curieux regard si court, qui s'arrêtait à fleur de ses yeux comme un rayon de lumière que couperait un obstacle invisible.

En ces moments-là, rien n'émanait de lui que l'apparence de sa forme. Il ne dégageait pas cette atmosphère de vie qui flotte autour de l'homme, et qui, en se mêlant à celle d'autrui, constitue entre les êtres un premier mode de communication, plus efficace souvent que la parole ou que la vue. Sans doute cette atmosphère devait se concentrer à l'intérieur. Mais alors quelle prodigieuse intensité de vie secrète flambait derrière ces rigides parois ! (223-224頁)

(ロックの独房に通されたとき、ぼくがある種の不安を感じなかったといえば、嘘になるだろう。激しい嫌悪もおぼえたさ。なにしろ、相手は名だたる殺人鬼だから。やつはベッドの縁に腰かけていてね。奇妙な眼つきで鼻先を見つめていた。まるで、そこに透明な何かがあって、視

線が吸いとられてしまうという感じなんだ。あのときのロックは、ぬけがらのように見えた。人には、めいめい固有の生気があるものでね。他人と意思をつうじするためには、まず、おたがいの生気を混ぜ合わせる必要がある。しかも、こうするだけで、ことばや視線以上にうまくつうじてしまう場合だって多い。ところが、あのときのロックには、彼固有の生気というものがまったく感じられなかった。いや、彼の生気はひたすら内部に向かって発散されていたに相違ない。だとすれば、あの冷たい顔の奥でなんと激しい生気が、しかも人知れず燃えさかっていたことだろう！)(218-219頁)

次に誤りを一例挙げておく。Rocの殺人の動機について述べる部分である。フランス語原文(日本語訳)、中国語訳を以下に示す。

La folie? Les conclusions des médecins furent catégoriques: Justinien Roc avait toute sa raison. Renonçant pour une fois à son mutisme, il répondit à leurs questions avec une logique et un bon sens admirables. (224-225頁)

(では、狂気の犯罪か？しかし医師団はこぞって、ジュスティニアン・ロックは正真正銘の正気だという。ひとたび口を開けば、医者連中の質問にたいして、論理的に、しかもすばらしい良識をもってこたえるんだ。)(221頁)

於是最後の解決。不得不説他是箇瘋子

了。那箇檢驗的達克透。也證明他神經已壞。頗有瘋癲之狀。說也奇怪。那石喬士聽了達克透說他是瘋子。反而開口說起話來。清清楚楚回答問官訊問的話兒。(6頁)

(そこで最終的に、彼は狂人だと言わざるをえなくなった。調査したドクターも彼の神経がおかしくなり、気が狂った様子をよく示していることを認めた。奇妙なことだが、Justinien Rocはドクターが自分のことを狂人だと言ったと聞くと、逆に口を開いて話を始め、担当者の訊問にはっきりと答えた。)

「医師」ならばそのまま中国語にもあるのに、なぜ“達克透”という音訳(しかも英語からの)をわざわざ使っているのか。或いは、中国語訳はフランス語原作からではなく、英語訳本からの転訳かもしれない。

その他、中国語訳は(一) - (四)に分けられているが、原作には番号による区切はない。また、タイトルが単純にわかりやすく変えられ、地名が原作と異なる部分もあるものの、全体としてはいい訳だと思う。

3 .

ルパンものとは異なる、Leblancのユニークな短篇作品が、発表から4年後という早い時期に中国に入っていたことに、訳者のセンスのよさを感じる(偶然かも知れないが)。今に至るまで見過ごされてきた面白い翻訳作品を拾い上げ、その原作を明らかにした点で本稿の存在意義はあ

ると思う。

最後に、作品の最後の部分の原文(日本語訳)と中国語訳を以下に示す。

Oh! l'horrible regard de tristesse! J'en fus bouleversé. Toute sa conviction navrante, toute la netteté de son souvenir affreux, tout se rua en moi comme un torrent de folie... Et en même temps que lui... et à mesure que s'accomplissait l'ignoble besogne... je compris à mon tour ... je me souvins... cela s'était déjà passé ... il avait déjà franchi cet espace et courbé le dos... Pour la seconde fois, à l'aube livide, parmi le silence tragique, la tête de Justinien Roc tombait... (229頁)

(ああ! あのときの、彼の眼差し!

あの悲痛な眼差しに、ぼくは耐えられなかった。ロックは確信したんだ。これも見たことがある、とね。無念さや苦しみや　ロックのあらゆる感情はない混ぜになり、狂気の奔流と化して、ぼくにおそいかかってきた。それがきっかけだった.....処刑が進行するにつれ.....ぼくにもわかったのさ.....ぼくは、思いだしたんだ.....こういうことが、むかしあった。ジュスティニアン・ロックが、死刑台にのぼり、背中をまるめ.....雲のたれこめた明け方、悲劇的な沈黙につつまれて首をはねられたのは.....あのときが、二度目だったんだ!)(233頁)

眸子中露出一派悽惶的光兒來。我瞧著他。十分難受。覺得他昨天所說的話。和此刻的狀況。委實把我的神經攪亂得幾乎

要發狂起來。一會兒我心中忽然起了箇奇異的感觸。好似從前也曾瞧見過這事一般。石喬士平臥在斷頭臺上的樣兒。和四圍的景象。都和前次不爽毫末。半晌吾在這黯淡的晨光中。萬籟俱寂時。瞧見那石喬士的頭兒。第二次落在地上。(13頁) 罍

近代小説家張毅漢生平續考

郭 浩 帆

【注】

1) 初出誌・短篇集初版ともに未見。本稿では、Jean-Baptiste Baronian編『Histoires Terribles de Revenants』(Librairie des Champs-Élysées, 1979)に収められたものを使用した。なお、短篇集『La Robe d'écailles roses』は、版によって収録作品に違いがあり、「Éditions Pierre Lafitte, Copyright par Librairie Hachette, 1920」には、この『L'Homme qui se souvient』は収録されていない。

【参考文献・ホームページ(HP)】

裴效維執筆“周瘦鷗”(馬良春、李福田総主編《中国文学大辞典》第6巻,天津人民1991.10)

ペレンナ管理HP「怪盜紳士アルセーヌ・ルパン」

<http://perenna.my-cafe.jp/index.html>
(2007年10月8日確認)

* 樽本照雄氏から“哲理小説”という小説ジャンルについて御教示をいただきました。末尾ながら記して御礼申し上げます。

本誌第89号の公開予定は4月1日です
<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

張毅漢是清末民初一位非常活躍的小説家。20世紀前20年間，他先後翻譯和創作小説100餘種，發表小説理論文章多篇，在作品數量上堪稱大家。然而到目前為止，有關張毅漢的資料還很少見，對於他的研究基本上還處於空白階段。數年前，筆者曾撰一文《張毅漢——一位被遺忘的小説家》，發表在[日]《清末小説》第26號(2003年刊)上。文章參照前人的相關記述，從“張毅漢與張其詡”、“張毅漢與包天笑的合作”、“張毅漢與鴛鴦蝴蝶派的關係”和“張毅漢以後的創作生涯及其它情況”四方面，對張毅漢的生平做了一些考查，得出如下結論：

張毅漢(1895-1950)，原名其詡，又名亦庵，廣東新會人，幼年失怙，賴寡母黃翠凝撫育長大。先入上海工部局所辦華童公學求學，13歲在《月月小説》上發表短篇小説《兩頭蛇》(一名《印度蛇》)，署名“張其詡”。後因家庭貧困，輟學到江南製造局謀

生，16歲參加武昌起義。辛亥革命後仍回上海，在製造局做工，同時從事文學活動。自1908年至20世紀20年代，先後發表翻譯和創作文學作品130餘種（前期多與包天笑合作），多數為翻譯小說。張毅漢多才多藝，善攝影、音樂、繪畫，民初曾在粵東中學執教。抗戰後因生活所迫遷居香港，1950年11月在香港病逝，終年56歲。

當時由於資料缺乏，文章對於張毅漢20年代以後的文學活動、抗戰前後直到去世的生活狀況等問題，都沒能說得很清楚，一直覺得是個缺憾。今年一個偶然的機會，筆者讀到復旦大學陳思和教授給柳珊博士的著作《1910-1920年間的 小說月報 研究》寫的書評，文中提到他的父親因在中學里受到一位教師的影響而走上從文道路，那位教師名叫張亦庵*1。受陳思和教授的啓發，筆者又陸續查閱了一些資料，現將其綴成一文，作為對張毅漢生平考證的補充。

一、從小說家張毅漢到老師張亦庵

張毅漢又名張亦庵，見於鄭逸梅《清末民初文壇軼事》中《張毅漢提倡語體文》一文：“他的署名，除毅漢外，經常以亦庵作為筆名”*2。此外，包天笑《釧影樓回憶錄》“編輯雜誌之始”中也有“其時張毅漢（今更名為亦庵）年不過十二三歲，他母親的譯稿常由他送來”*3之語。但張毅漢的作品署名多為“毅漢”、“毅”，或者“其訥”，清末民初小說中，筆者迄今未見到署名“亦庵”或者“張亦庵”的作品，

當時覺得很奇怪，因此在《張毅漢 一位被遺忘的小說家》一文中推測，或許這些作品尚未被民初的文學書目收錄。現在看來，情況並非完全如此。

張毅漢童年時名其訥，他13歲時發表第一篇小說《兩頭蛇》就署名“張其訥”。辛亥革命後，他開始投身文學事業，與包天笑合作翻譯小說，這時候的名字成了張毅漢，因此作品署名多為“毅漢”，不過“其訥”這個名字還偶爾使用，如：發表在《小說大觀》上的“偵探小說”《賊習慣》署名“其訥”，“醫學小說”《紅燈談屑》署名“其訥、天笑譯”，《吻緣》署名“其訥”，《美使駐德筆記》署名“張其訥譯”。20年代以後，張毅漢更名為亦庵，從事教育事業，那個時候他不再發表小說，所以民初的小說目錄中自然也就看不到張亦庵這個名字了。

張毅漢從1908年起開始發表作品，1914年以後，已逐漸成為小說界相當活躍的作家，聲名幾可以與葉楚傖、姚鵬雛、陳蝶仙、範煙橋、周瘦鵑等人並駕齊驅。其翻譯和創作的數量，1914年為12種，1915年為23種，1916年為17種，1917年為18種，1918年為21種。從1918年開始，張毅漢的大部分作品發表在商務印書館的《小說月報》上。在此後的兩年間，他逐漸成為《小說月報》的重要作者，當時幾乎每期刊物上都有張毅漢的名字出現。1921年，沈雁冰（茅盾）擔任《小說月報》主編，從1921年第12卷起，《小說月報》徹底改頭換面，文學研究會成員成為刊物的核心力量，包括張毅漢在內的“舊面孔”一下子銷聲匿跡。隨著《小說月報》的全面改革，

張毅漢小說事業的黃金時代結束了。此後，儘管張毅漢陸續發表過一些作品，文學活動也一直持續到40年代，但自20年代以後，他的主要心思和精力已從小說轉到了教育事業上。

鄭逸梅說，二次革命失敗後，張毅漢一方面從事著述及翻譯，一方面又掌教粵東中學，為鄉梓培植人才*4。粵東中學是一所旅滬粵人創辦的子弟學校，其前身是廣東珠海人盧頌虔於1913年創辦的培德小學，地點在上海北四川路清雲里。1922年，廣肇公所（粵人旅滬團體）接辦培德小學，改名上海廣肇公學，由盧頌虔續任校長。1933年，廣肇公所撥4萬銀元和募捐36.7萬銀元，在水電路建造新校舍，改名為粵東中學，1936年新校舍落成。據說，學校規模之龐大，設備之齊全，為當時上海中學中罕見。市教育局為此還傳令嘉獎：“該校校舍新建，寬敞合用，設備良好，行政有條不紊，教學合法，訓導有方，學生活潑守秩序，成績斐然。成績列入甲等” *5。

20年代以後，張毅漢開始投身於教育事業，先後在廣肇公學和粵東中學擔任教師，成了深受學生喜愛甚至崇拜的張亦庵老師。他主教國文，同時利用自己多才多藝的特點，組織、引導學生學習音樂、美術等課程，多年來為國家培育了不少有用的人才。音樂家黃飛立就是張亦庵在廣肇公學時期培養的學生。據說，20年代的上海廣肇公學實行了一種較科學、全面的教育方案，除一般的學校課程外，音樂、外語、美術、手工技能等都成了學校教授的對象。“黃飛立是在學校的童子軍樂隊里逐漸愛上音樂的，張亦庵老師是個樂器的多

面手，多才多能的他，憑著對音樂的一腔熱忱，成為學校童子軍們崇拜的偶像，也成為小黃飛立效倣的榜樣。就這樣，黃飛立開始了自己的音樂之旅”。“就音樂而言，廣肇公學的張亦庵老師才是真正領他走上音樂之路的人” *6。

復旦大學陳思和教授的父親也是張亦庵的學生。據陳思和父親回憶，他在中學里受到張亦庵老師的影響走上從文道路。張老師多才多藝，能彈琴作曲，又能繪畫，他組織學生們辦刊物《蓓蕾》，第一期的封面是他親自畫的，圖為一個孩子手擎一支花朵。他教學生們如何木刻，如何印刷，如何編輯。他患了很嚴重的哮喘，但一騎上摩托車，照樣生龍活虎地帶領學生參加童子軍的軍事演習。父親受張老師的影響，畢業後編過刊物和報紙，張老師替他約稿，撰稿者有包天笑、嚴獨鶴、周瘦鵑等人*7。

汪曾祺在《金嶽霖先生》一文中說，一個人一生哪怕只教出一個好學生，也值得了。張亦庵是一個好老師，在廣肇公學和粵東中學期間，不知教出了多少好學生，可惜由於資料缺乏，今天已經無從統計了，不過我們真的應該對這位身患痼疾却對教育事業充滿熱誠的好老師致以深深的敬意。陳思和教授說，他自從聽了父親關於張亦庵老師的講述後，“讀書時總在留意張亦庵其人，好像也無甚收穫。這次讀柳珊的論文，她却明白無誤地查證，在《小說月報》上發表了許多小說理論、翻譯和創作的張毅漢，就是我苦苦尋找的張亦庵。而且她從鄭逸梅老人的回憶里蒐集的關於張亦庵的描述，與父親的回憶留在我印象里的張亦庵完全相同，解決了我心頭的一大



懸案。其實張毅漢的文章我早讀過，鄭老先生也拜訪多次，竟沒有想到把張亦庵聯係起來，真是慚愧煞也”^{*8}。毫無疑問，這是發自內心的話。

二、二十年代以後張毅漢的其他活動

1921年，隨著《小說月報》的全面改革，張毅漢結束了其小說事業的黃金時代。一個顯著的證明是，《小說月報》改革以後，商務印書館應鴛鴦蝴蝶派作家的要求，於1923年1月創辦了《小說世界》週刊，該刊由葉勁風、胡寄塵編輯，《小說月報》的老作者幾乎都在這裏發表過作品，但張毅漢只有一個短篇《黃金偶像》登出。此後，張毅漢將主要時間和精力投入到教育事業中，儘管還有文學作品陸續問世，但數量已大不如前。20年代以後張毅漢的創作和翻譯情況究竟如何，由於資料所限，如今還無法列出比較詳細的目錄，目前所能查閱到的主要有：

(1) 在張光宇、嚴諤聲編輯的《滑稽

畫報》(1919年10月創刊)發表論文《審美》。

(2) 在包天笑編輯的《星期》週刊(1922.2-1923.3)上發表《男女同學》、《訃聞》、《敵》、《金錢就是職業嗎》、《簫》、《生兒的報償》等作品。

(3) 在葉勁風、胡寄塵編輯的《小說世界》週刊(1923.1.5-1929.12)上發表短篇《黃金偶像》。

(4) 在周瘦鵑編輯的《良友》月刊(1926.2.25創刊)上發表小說《紅色的豆腐》。

(5) 在《藝術界》(1926.1.15-1927.11月)上發表論文《木刻圖畫》。

(6) 出版畫冊《略畫範本》，1935年(民國二十四年)版，署“張亦庵繪，上海中央書店印行”，32開，162頁。此書後又有民國三十七年中央書店重印本。

(7) 在1942年11月1日創刊的《大眾》月刊上發表過小說作品。

在《張毅漢 一位被遺忘的小說家》

中，筆者推測，張毅漢在文學史上極少被人提及的原因之一是沒有創辦、編輯過刊物，因為這是當時文人擴大影響、提高知名度的重要手段。現在看來，情況也非如此。在20年代末30年代初，張毅漢做過《文華畫報》和《文華藝術月刊》的文藝編輯。《文華畫報》創刊於1929年8月，月刊，8開本。上海好友藝術社出版。總編輯梁鼎銘。圖畫編輯梁雪清，文藝編輯張亦庵。該刊注重時事新聞圖片，兼及雕刻、漫畫、石刻、攝影等美術作品。刊有關良、朱杞瞻、汪亞塵、梁啓超、潘玉良等人的作品。出過婚姻、學生、民族、婦女、民衆藝術、體育等方面的專刊。1933年10月出版第41期後停刊^{*9}。《文華藝術月刊》也於1929年8月創刊，出至1935年6月終刊，共54期。由上海好友藝術社出版，上海文華美術圖書印刷有限公司發行。繪圖編輯為梁鼎銘、雪清。文藝編輯為趙荅狂，後改張亦庵。《文華藝術月刊》分文字與圖畫兩部分。主要刊登美術、文學、時事政治方面的圖片與文字，其中婦女生活方面的圖片資料豐富，對研究民國時期婦女生活與活動具有較高的參考價值^{*10}。由於未見原物，對於《文華畫報》與《文華藝術月刊》之間的確切關係，筆者尚不能作出準確判斷，但張毅漢做過刊物編輯，在學校里組織學生辦刊物，並且替編刊物的學生向包天笑、嚴獨鶴、周瘦鵑等名家約稿，這說明直到30年代，他與當時文藝界的關係還是比較密切的，只是後來他逐漸遠離小說界，所以與包天笑的交往才日漸稀疏了，不過感情一直不錯。包天笑《我與鴛鴦蝴蝶派》一文中說：“毅漢是廣東人，少

孤，但他的母親黃女士諳西文，能譯小說，賣文撫孤，常托我介紹出版。毅漢後承母業，亦托我介紹，然每退稿，不得已予以潤色，並列我名，始獲售。我念其窮困苦學，所得悉歸彼，而毅漢必欲以所得十分之三歸我，至今思之，猶不勝黃墟之痛也”^{*11}。這時距張毅漢去世已經有十年之久了。

除此之外，張毅漢還是中國早期的攝影家，被稱為“攝影藝術的先驅者”；還是中國早期的木刻家，1942年11月25日成立的中國木刻作者協會中，他是7位常務理事中的一員^{*12}。

鄭逸梅說張毅漢“勞瘁多年，已有痼疾，至一九五一年十一月，一病不起，年五十六歲”^{*13}，至於他得的“痼疾”到底是什麼，原先一直不清楚，但看陳思和父親的回憶，張毅漢得的“痼疾”應該是哮喘病，後來極有可能也是死於哮喘。

儘管有關張毅漢的問題還有一些不能完全考證清楚，但我們至少可以說，張毅漢不僅是清末民初的小說大家，而且是一位好老師，中國早期的攝影家、音樂家和木刻家。這樣一位多才多藝的文學家，却在中國近現代文學史上被埋沒了，這真是一件遺憾的事情。2004年底，復旦大學柳珊博士的學位論文《1910-1920年間的小說月報研究》由百花洲文藝出版社出版。該書辟專節，用近萬字的篇幅介紹了《小說月報》上張毅漢的小說理論，我們在對柳珊博士表示充分敬意的同時，也希望今後能有更多的學人來關注張毅漢，關注這個社會轉型時期普通知識份子在中國文化史上做出的貢獻。

【注】

- 1) 7) 8) 陳思和：《一份填補空白的研究報告 評柳珊 1910-1920年間的小說月報研究》，載2005年3月3日《文學報》，此文原為該書序言。
- 2) 4) 13) 《張毅漢提倡語體文》，《鄭逸梅選集》第2卷，黑龍江人民出版社1991年版，第227-229頁。
- 3) 《釧影樓回憶錄》，香港大華出版社1971年版，第359頁。
- 5) 《上海地方誌·區縣誌·虹口區志》第三十四編“人物”，<http://www.shtong.gov.cn/node2/node4/node2249/node4418/node20229/node62973/node63632/userobject1ai52537.html>
- 6) 韓輝麗：《揮舞一個無悔人生 指揮家、教育家黃飛立》，載《音樂生活》2003年第9期。
- 9) 《上海出版志·期刊·綜合性刊物·總類》，上海社會科學院出版社2000年版，第705頁。
- 10) 南京圖書館·館藏資源·民國文獻 http://www.jslib.org.cn/njlib_gczy/njlib_mbwx/t20050805_3162.htm
- 11) 《我與鴛鴦蝴蝶派》，原刊1960年7月27日香港《文匯報》，轉引自魏紹昌編《鴛鴦蝴蝶派研究資料》“上卷·史料部分”，上海文藝出版社1984年版，第178 - 179頁。
- 12) 《上海美術志·美術機構與美術社團·民國時期創設者》，<http://www.shtong.gov.cn/node2/node2245/node73148/node73154/node73182/node73816/userobject1ai86901.html>

網羅精英 任人唯才
淺談張元濟和鄭富灼

張 英

張元濟是商務印書館編譯所的首創者，也是商務印書館教科書編纂工作的實際負責人與組織者。張元濟工作的特點是什麼呢？我同意張人鳳先生在《智民之師張元濟》一書中說的“任人惟才”。

張人鳳先生說：“編譯所開創之初，對張元濟來說，首先是網羅人才。……張元濟聘入編譯所的一批編輯，都是熱衷新學，思想開明，有新知識結構，甚至留過洋的年輕知識分子”。張人鳳先生具體舉了五個人為例：蔡元培、蔣維喬、庄俞、杜亞泉、鄭富灼。

我在撰寫《啓迪民智的鑰匙 商務印書館前期英語教科書》的過程中，注意到鄭富灼這個人。我以為鄭富灼是一個對中國英語教材建設和中國英語教學大有貢獻的人物。

鄭富灼擔任商務印書館編譯所英語部主任21年，參與編寫英語教科書數十種，可惜現在知道他的人不多，知道他所編寫的教材的人也不多。完成《啓迪民智的鑰匙 商務印書館前期英語教科書》后，我

又查找了一些資料，寫過一篇文章《鄭富灼及其編纂的商務印書館英語教科書》，發表在2005年4月1日日本出版的《清末小說通訊》第77期上。

鄭富灼被列為被網羅的人才具體的例證呢？張元濟是怎樣發揮鄭富灼的作用呢？張人鳳先生沒有明確的敘述，但是却有根據。我以為從張人鳳先生整理的、河北教育出版社出版的《張元濟日記》中可以找到在工作、用人、經濟三個方面，張元濟對鄭富灼都是放手支持的記錄。各舉5個例子說明：

一、在工作上予以真正的信任：

- 1、1912年12月26日“ 鄭君約張士一編《英文讀本》。按照新部令，包括拼法、讀法、譯解、翻譯、會話在內計五冊，工五百元，六個月完工”。
- 2、1916年3月8日“ 吳步云薦郁少華，已經告鄭君，囑步云取其英文改本，送鄭君閱”。
- 3、1916年8月28日“ 蔣君該稿不甚着意，當諄戒之。余云，應否告乃叔，鄭云可緩”。
- 4、1919年1月8日“ 擬將《英漢詞典》事例劃歸詞典部。8/1/9午飯後告鄭，謂可行”。
- 5、1919年2月25日“ 鄭交來致美領事，當交叔良。囑其祕密”。

五個例子，無不說明張元濟在工作上對鄭富灼的信任。第一則是實際編輯出版的實例，鄭富灼可以決定出版的內容，並直接約談作者。第五則的具體內容無法可知，但既是“ 祕密 ” 出自鄭富灼之手，當

然非核心人物不可能參加。

二、在用人上予以充分的尊重

- 1、1913年2月1日“ 鄭先生介紹周寄梅君編英文書。周在美國衛康沁大學卒業，專習教育學，現充北京清華學校副校長。渠允擔任。住方濱橋華成路壽康里五號”。
- 2、1916年11月28日“ 繆詩賡，民立中學畢業，鄭意欲用”。
- 3、1917年2月8日“ 鄭君擬添用佐手一人，姓江，能打字及速寫。月薪廿五元，已允之”。
- 4、1919年10月2日“ 鄭先生來言，謝福生系粵人，年三十三歲，長於煙臺，在教會學堂畢業。通英、法文。曾充威海衛港赫德翻譯。現在青年會教授英文。擬令在外幫撰《英文雜誌》用稿。余允之”。
- 5、1920年7月27日“ 謝為要求試用半年，兩月前通知。約鄭商，鄭亦謂可行，但不必兩月前通知，仍以一月為期，能早即早。已告拔翁”。（這段文字中的“ 謝 ” 是謝福生，7月21日寫信向張元濟介紹“ 一個葡國女子，任速寫及打字之役”。）

在《張元濟日記》中記錄鄭富灼與張元濟因工作而涉及人事任用、調動的記錄數十則，或張元濟直接征求鄭富灼用人的意見，或鄭富灼向張元濟推薦人才，結果基本上都能夠按照鄭富灼的建議施行。

張元濟在用人問題上充分信任和尊重鄭富灼，鄭富灼也同樣盡職盡責。如1916年2月25日張元濟記錄這樣一件事：伊文思

想與金恩公司合作，又想與商務印書館合作。張元濟與鄭富灼商量此事“鄭云，其（伊文思）意以為與本公司合辦甚有裨益。但恐其有金恩為援，要求較奢耳”。足見鄭考慮問題也直接為商務印書館着想。

三、在經濟上給予全力的支持

- 1、1913年6月16日“午后鄭君來信，力言周萬不可去。如每月加薪廿五兩，則與高師薪相埒，當可挽留。已商翰翁，允為照辦。……因函知鄭君，自下月起每月加送廿五兩，合三個月一送……”（商務印書館、中華書局、高等師範學校，為爭取周越然、張士一人才上各盡所能，鄭富灼的方法被張元濟採用。）
- 2、1916年8月7日平海瀾願任編譯，鄭君擬約至英文部，月薪100元。
- 3、1916年8月24日“西人Hayes，為四川成都青年會教育部書記，編有《新輯英文會話》，已付印，欲售與本館。鄭君言頗好，酌送廿五元至卅元。查本館英語會話無多，鄭君意謂可購，已允知。
- 4、1916年11月27日“鄭君開單，周越然加薪后七日內加班，應加廿二日半，補薪九兩一錢六分”。
- 5、1919年1月24日“周由塵將已刊入《英語周刊》中之《英語發音學》一種在外修改。鄭擬單行，給予一百元”。

作為商務印書館的負責人，張元濟處理每一問題，必然要從經濟上加以考慮。但是從張元濟的日記中可以看到，對於鄭富灼提出的經濟上的要求、張元濟基本上

都給以滿足。從上述五例看，鄭富灼要挽留人才，張元濟滿足他提出的加薪的要求；鄭富灼要買的資料，張元濟立即批准；鄭富灼要辦的事情，張元濟立即同意。

以上十五個實例，都說明了張元濟對鄭富灼的信任和 support。由此我們可以想見，商務印書館之所以能夠在數十年里網羅了大批人才並做出如此的成績，是張元濟“任人唯才”指導思想的結果。所以我以為討論張元濟的思想，就應該注意到他“網羅精英、任人唯才”這一個特點。

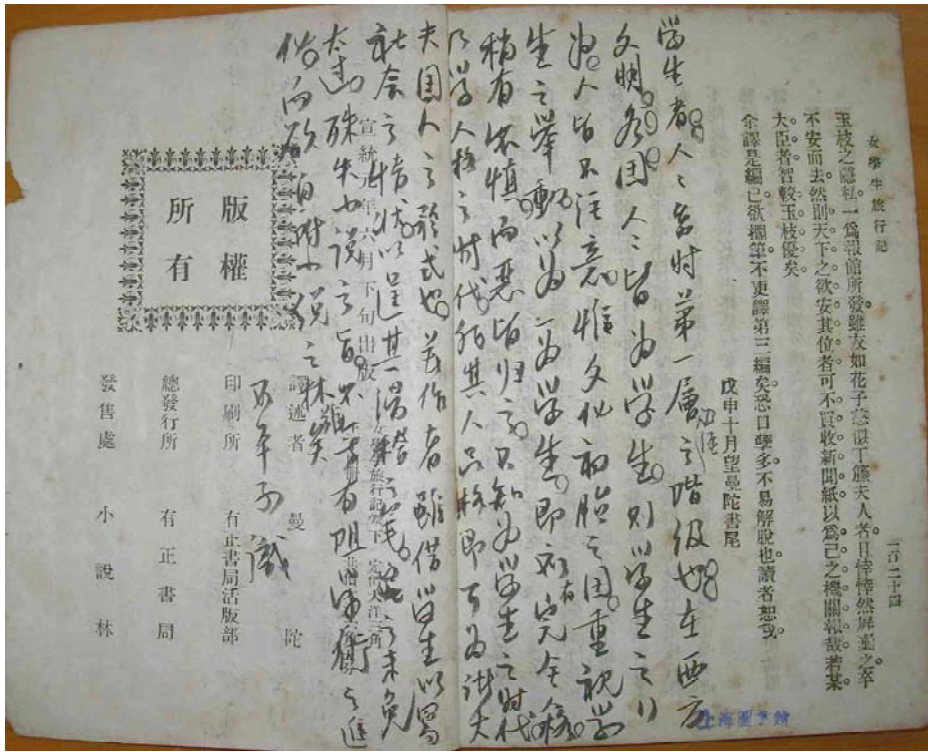
我因從事英語教學而涉獵了商務印書館所編英語教科書，又因翻閱商務印書館的英語教科書而對鄭富灼有了一些了解。今年是商務印書館成立110周年，翻閱《張元濟日記》有感而發，寫了上面一些文字，希望能夠給研究者提供一些資料。在寫作這篇文章中張人鳳先生和劉德隆先生都給予我很多幫助，在此表示感謝。

我對鄭富灼了解不多，將我寫的《鄭富灼及其編纂的商務印書館英語教科書》附在此文之后以供參考。 罇

2007年7月中國上海草稿

2007年8月美國馬里蘭初稿

本文完成后，張人鳳先生又提供了兩篇文章給我參考，一是《哈佛偶得 商務印書館英文部主任鄭富灼》，刊於2007年6月《出版博物館館刊》創刊號，作者楊揚；一是《我在商務編譯所的七年》，復印自《商務印書館九十五年》，作者唐鳴時。兩文對鄭富灼的記錄形象具體，對研究鄭富灼的資料有較多的介紹。對張人鳳先生的幫助再次表示感謝。 2007年8月底



狄平子小說資料一則

武 禧

狄葆賢，字楚青，一字平子，又號平等閣主。江蘇溧陽人。早年積極主張變法，常與譚嗣同等游，戊戌變法失敗後，他逃亡日本。後返上海仍從事革命，失敗後，再次出走日本。後回國集資從事新聞事業。一九〇四年六月，在上海創辦《時報》，頗

受讀者歡迎。一九一二年創辦有正書局，局址設在上海四馬路（今福州路）望平街，該書局在兩年多的時間裡，出版經書佛像達七百多種。後來有正書局又成爲佛學書局的分發行所。同年十月，創辦《佛學叢報》，爲我國首創佛教刊物，影響甚大。一九三一年、與葉恭綽等在上海發起影印宋版《磧砂藏》。對於佛法，初篤信淨土，後皈依常州天寧寺冶開禪師，經其指點，始對禪機有所領悟。其夫人汪觀定也對禪法領悟頗深，對其學佛常加指點。

狄平子生平好詩詞書畫，著有《平等閣詩話》和《平等閣日記》，頗具歷史考據價值。

有正書局出版有多種小說。筆者近見有正書局出版、曼陀譯述之《女學生旅行記》兩種版本。其中宣統元年六月下旬出版之“卷下”，版權頁上有毛筆手迹，署

“平子識”疑爲狄氏親筆所書。惟落款“平子”二字前一字，未能辨識、未敢確認。將其影印於后，并錄其全文如下，以供研究者參考：

學生者，人自幼時第一層必經之階級也。在西方文明各國，人人皆爲學生。則學生之行爲，人皆不注意。惟文化初胎之國，重視學生之舉動，以爲一爲學生，即應有完全人格，稍有不慎而惡皆歸之。不知爲學生之時代，乃學人格之時代。非其人格即可爲諸大夫國人之矜式也。著作者雖借學生以寫社會之情狀，以呈其滑稽之筆。究之未免太過，殊失小説之旨。不无有阻碍學術之進，而欲自附小説之林難矣。

平子識
罍

中国近代文学研究『留得』第14期(2007.7)が刊行されている。第15期(2007.9)は、『劉蕙孫《周易》講義』(天津古籍出版社2007.4)を、第16期(2007.10)は、「張元濟研討会」開催などを特集する。

『明清小説研究』2007年第2期(総第84期)

2007発行月日不記

晚清《新聞報》与小説相關編年(1903-1905)

.....陳 大康

以理殺人与有罪推定 《老残遊記》对理学
化清官的批判

.....王 学鈞

限制叙事意識的自覚 吳趸人小説叙事特徵
研究之一

.....胡 全章

論《海上花列伝》文学形式的選択...高 群

晚清小説作者掃描(拾叁)

武 禧

(零六二)

天虛我生陳蝶仙

小説創作：《淚珠縁》《情網蛛絲》《鴛鴦血》《自由花》《玉天恨室》等100多種。

翻譯小説：《杜賓偵探案》《桑狄克偵探案》等。

創辦雜誌：《著作林》。

陳栩(1879-1940)：浙江錢塘人。原名壽嵩、或壽崧，字叔昆。后改名栩，字蝶仙。亦署陳蜨，號栩園。別署甚多，主要有天虛我生、大橋式羽、櫻川三郎、太常仙蝶、惜紅生、老蝶、國貨之隱者等。齋名有一粟園、夕陽半紅樓、雨花草堂、紫玲瓏閣、醉花仙館等約二十余个。陳栩1879年7月22日生於杭州的一個儒醫之家。一生分爲兩個時期，前期以著作爲主，后期以實業爲主，但是互相穿插，不能截然分開。其自述：“五歲就塾，七歲而孤，習於慈訓，乃辨四聲”。十三歲就在《燒燈即事》的詩中寫出了“梅樹雪消紅乍瘦，杏花風起綠初肥”的佳句。1895年時年十六歲主編《大廈報》。十八歲時，他研讀曹雪

芹的《紅樓夢》，開始寫長篇小說《淚珠緣》，採用章回體形式，其中也點綴一些詩詞酒令。他自己說寫的是“兒女癡情，家常閑話”。原計劃寫一百二十回，又因為要寫其他作品，最后只完成了一百零七回。1900年中華圖書館印行《淚珠緣》，曾風行一時，時年二十一歲。同時開設萃利公司，經營書籍、文具、紙張，又開設石印局，從事印刷業。1907年創辦小說雜誌《著作林》、后又辦《遊戲雜誌》、主編《女子世界》、《申報·自由談》。1917年加入南社。同年研制成“無敵”牌牙粉，后成立家庭工業社股份有限公司。五四運動后，在上海、無錫、寧波、鎮江、杭州、太倉等處設廠並創辦《機聯會刊》宣傳國貨。陳栩在《禮拜六》、《小說大觀》《中華小說界》等發表大量小說作品，是鴛鴦蝴蝶派的主要代表作家。

《著作林》創辦於1907年。1908年12月並入《國聞日報》后停刊，共出21期。主要内容為詩詞，又有傳奇、雜劇。

(零六三)

鐵庵

小說創作：《宜興奇案雙壇記》《查潘斗勝全傳》

鐵庵(又署：陽羨鐵庵隱士)：阮鐵庵，字探華，號劍南白芙奇叟、雁宕燦花生。約生於十九世紀四十年代，清代著名學者阮元曾孫。同治七年(1868年)“宴罷瓊林，春風得意。返棹過申，友人招飲。呼數十花枝侑觴，引歌度曲。宛款系情”。於是“遍訪名花，精求姘女，酒地花天”。1901年前居住於上海“味蕁園”(張園)。出版

《宜興奇案雙壇記》《查潘斗勝全傳》兩書(以上根據《中國通俗小說總目提要》於盛庭撰兩書簡介整理)。

查阮元為江蘇揚州人(又一說為江蘇儀征人)。鐵庵自署“陽羨鐵庵”。“陽羨”為江蘇宜興秦漢時古稱。

又：“劍南”、“雁宕”兩詞均為地名，似與揚州、儀征、宜興均無關係。待考。

(零六四)

海上癡仙

小說創作：《仙俠五花劍》《飛仙劍俠奇緣》

海上癡仙：真實情況不明。

中國近代名“劍癡”者，有福建晉江人楊吉爻者，字恆如，號劍癡，別署定香館主。擅國畫。1938年任《抗敵畫刊》編輯，海外新聞社駐滬通訊員。與《仙俠五花劍》作者似非一人。

為《仙俠五花劍》作序之狎鴟子不見任何著錄。但是為此說部題詞者“歙縣周忠鑿病鴛”却有案可查：安徽歙縣人。字品珊，號病鴛。別署病鴛詞人。早年肄業錢肆。后從何桂笙習詞章及新聞。曾主任《同文滬報·消閑錄》。后多為《笑林報》撰稿。善酒，亦因酒而卒，時年42歲。

又：何桂笙：本名何鏞，生於同治、光緒間。浙江紹興人，字桂笙，或作桂生。別號高昌寒食生。室名瑋瑋山房。山陰名士，善鼓琴，精音律。著有《瑋瑋山房紅樓夢詞》一卷。

另：又有同名《仙俠五花劍》一種，宣統二年(1910)文元書庄石印本。有光緒二十六年(1900)惜花吟主自敘。

(零六五)

獨頭山人

小説創作：《波蘭的故事》(又《波蘭國的故事》)

獨頭山人：孫翼中(1873年-?)。浙江杭州人。字藕耕、別號江東、醫俗道人。筆名獨頭、獨頭山人、獨頭山熊。1901年蔡元培與黃仲玉在杭州結婚，孫翼中、宋恕、汪希、叶景範等知名之士參加，舉行演說會以代替舊風俗的“鬧新房”。曾任杭州求是書院教員。求是書院一度為傳播民主革命思想的基地。時史壽白曾請孫翼中命作文題《罪辯文》，因同學們對日益腐敗清廷不滿，便借題發揮，口殊筆伐，史壽白評閱時將某同學文中的“本朝”改為“賊清”，並將文卷在同學中傳閱，史、孫兩人險被清廷逮捕。轉而去紹興東湖東芸學院。1902年東渡日本留學並參加青年會、興中會。與蔣智由等共同創辦《浙江潮》，着重揭露清政府的腐敗和帝國主義的侵華暴行，明確提出“革命造反”的主張。該刊銷量為留日學生刊物之冠。1903年，孫翼中從日本回國，接任《杭州白話報》經理兼主筆，報紙反清色彩更濃，報社一度成為光復會的活動據點。在當年杭州發行的7種省內外報紙中，銷數位居第一。但因此而再遭通緝。晚年曾任杭縣高小校長。1903年撰《朝鮮史》。 罇

林紓が冤罪であるとは……誰も想像しなかったはず 『林紓冤罪事件簿』発行しました

蔡元培を中傷した北京大学元教員

樽本照雄

林紓と蔡元培に關係して、問題は北京大学元教員徐某である。

徐某とは誰なのかを説明しなければわからない。林紓批判にかかわっている。

林紓が蔡元培にあてた手紙を公開した。そのなかに「車を引いて豆乳を売る輩[引車売漿之徒]」という語句を使用したのがはじまりだ。魯迅が「引車売漿者流」としてそれを「阿Q正伝」に取り込んだ。「阿Q正伝」を日本語に翻訳した山上正義に、魯迅は自分で注釈をつけて「蔡元培氏ノ父ヲ指ス」と説明した。この説明が現在にいたるまで定着している。

林紓は蔡元培の父親を中傷している、と研究者の全員が林を罵るのである。いうまでもないが、豆乳売りについて1919年当時の中国では、大学教授と比較して地位の低い職業だと差別していたことを背景にしている。現在のことを言っているのではない。ご了解いただきたい。

さて、林紓が蔡元培の父親を当てつけて書いたというのは間違っている。私は、

そう考える。魯迅は林紓の意図だと受け取っていたのは事実だ。しかしそれは、林紓の考えとは無関係である。林紓が蔡元培の父親を罵ったというのは事実無根なのだ。魯迅の理解は、すなわち林紓の意図したことだ、と研究者の思考は短絡している。林紓は、蔡元培の父親など当てこすってはいない。林紓は、魯迅から濡れ衣を着せられた。

蔡元培の父親を豆乳売りだと中傷したのは、筆名思孟という人物だった。林紓とはなんの関係もない。しかも、思孟の文章は、林紓の手紙が公表された後に出てきたものだ。

「息邪」(一名「北京大学鑄鼎録」という一連の文章に「蔡元培伝」(1919年8月7、8日の『公言報』に掲載。初出未見)がある。これが原文であるという*1。つまり、魯迅は中傷だと知っていて日本人の山上正義に、あたかも林紓が書いたかのようにデマを教え込んだという次第。私はこれを魯迅が引き起こした林紓冤罪事件だという。

当時、胡適も思孟の文章を読んでいる。彼は、『毎週評論』第33号(1919.8.3)に「關謬与息邪」(筆名天風)を書いた。

北京大学を退職した教員で宜興の徐某は、数ヵ月前「關謬」を書いて蔡子民(元培)を痛罵した。近頃また「息邪」を書いて蔡子民、陳独秀、胡適之、沈尹黙らを悪罵した。ここでは蔡氏について「ドイツに5年居住しながら百余の言葉しか知らず、

フランスに3年逃亡しながら10余の言葉しか知らない」と書く。さらに陳沈諸君が外国語に通じていないと嘲笑し、胡適が「英語は精通しているに近いが、知っている言葉は多くはない」という。私たちははじめ見たとき、この徐氏は外国語に精通しているはずだと考えた。ところが第1頁を開いてみると、Marx を Marks と綴っている。この「誤り[謬]も「うち消[關]」さなければならない。

というわけでこの徐某である。

さすがに胡適だ。彼の文章を読めば、事情をよく理解している。徐某は北京大学の元教員で宜興出身だという。しかも、「外国語に精通している」と説明する。同じ北京大学のことだから、胡適は徐某のことを知っているのも当たり前だ。

手がかりはありそうに思った。だが、徐姓で宜興出身者を調べてはみたが、見つからない。人物を特定することができないのは、もしかしたら別姓かもしれないし、宜興出身ではないかもしれない。だが、北京大学の関係者であればすぐにわかる人物なのだろう。

北京大学で教えていた徐姓の人物はひとりとは限らない。ここではひとつの可能性として徐崇欽をあげたい。

橋川時雄『中国文化界人物総鑑』(北京・中華法令編印館1940.10.25初版/名著普及会復刻1982.3.20。350頁)から引用する。

徐崇欽 一八七六 - X 字は敬侯、

江蘇崑山の人、米国に留学してエール大学の碩士。セント・ルイス大学を卒業。前清時代より教職に従ひ、上海高等実業学堂教務長、国立北京大学預科学長、唐山路礦学校教務長、北京工業大学教授、民国大学教務長兼教授、中国大学、朝陽大学、塩務学校及北京大学教授、青島市政府教育庁長等に歴任、近くは三呉大学教務長兼商学院長に任ず。

アメリカに留学して修士号を取得しているくらいだ、外国語に精通している。ただし、出身が宜興ではない。また、「徐君英語に長じ又社交を好み、人物円満にして才気あり」*2という紹介がある。これを見れば北京大学関係者を罵る文章を書いたとも思えない。

私が徐崇欽の名前を知ったのは、高平叔『蔡元培年譜長編』中冊(北京・人民教育出版社1996.11. 26-27頁)だ。これに北京大学改革の報道記事が、天津『大公報』(1917.4.22)から引用されている。

2カ所に徐崇欽の名前がでてくる。その大要は、つぎのとおり。

その1。預科組織の大改革だ。蔡元培が北京大学校長に就任して行なったのは、ひとつは学識のない中国、外国教員の罷免である。もうひとつは半独立している大学預科の整頓だ。学長徐崇欽は大学校長からの指揮を受けるのを望まず、預科大学と自称し一切の課程を大学とは連絡なく行っていた。蔡は本科との関係から見て現在の預科は廃止することにした。

文、理、法の3科にそれぞれ預科を附設する。

その2。北京大学の教職員は前の清時代からの意識をそのまま引きずっており地位が高いものだと考えている。その結果、校長の指揮を受け入れない。蔡元培は校長に就任したのち、庶務長舒某を罷免し、学監張某は夏休み後に罷免を予定する。これらの人物は蔡校長反対の風潮を煽動している。預科学長徐崇欽は、預科の改組をうけその学長を取り消しのうえ教員にされた恨みで、罷免された中国および外国の教員と連絡をとり蔡君反対運動を始めた、と。

大学の教職員ばかりでなく、学生たちの意識改革から蔡元培は着手する。組織改革を進めることとそれは同時進行であった。預科の学長を廃止し、本科の附属とすることで統一性を確立したことになる。そのあおりで権力の座から追われたかたちになったのが名前のおがっている徐崇欽なのだ。

彼だけが実名で出ている。ゆえに注目した。

預科学長からははずされた徐崇欽だが、教員としては北京大学に在籍している。

『北京大学日刊』に掲載された彼の名前を拾ってみた。

1917.11.27「本校捐助航空学校白故学員永魁莫疑一覧表(補登)」に徐崇欽の名がある。

1918.1.20「法科教員姓名及籍貫」に「徐崇欽 江蘇」と掲載されている。この時点では、北京大学教員である。

1918.3.19「法科研究所教員所任科目一覽表」には次のように書いてある。「徐崇欽 最近發明之科学的商業及工廠管理法 未開講」。「未開講」ということは、徐にやる気がなかったのか、受講生がいなかったのか、それはわからない。

以後、徐崇欽の名前を『北京大学日刊』に見つけることができなかった。

ところが、別人が浮上してきた。徐佩銑という。

前述のように、蔡元培は北京大学改革の一環として教員にふさわしくない人物をクビにした。外国語の教員には外国人も含まれていて裁判沙汰になったことも有名だ。

クビになった教員のひとりが徐佩銑だ。その人を紹介して「彼(蔡元培)はごろつき、「漁色団[探艶団]」団長、年若い英語教員徐佩銑らをクビにした」*3と表現している。それだけで詳細は不明。徐佩銑のほうが、蔡元培を後に中傷する人物として該当する可能性がまだ高いか。ただし、詳細がわからないのだからこちらもあくまでも可能性でしかない。

このふたりについて、まったくの見当はずれかもしれない。そのばあいは、申し訳ない。最初からあやまっておく。

北京大学をクビになった教員が蔡元培を逆恨みする。中傷する文章を新聞などに公表したのは事実だ。そのなかに蔡元培の父親が豆乳売りだと書いた思孟が実在する。思孟が徐崇欽か、あるいは徐佩銑かはわからない。だが、林紓とは関係がないことだけは確かである。 四

【注】

- 1) 王永昌「“引車売漿者流”指的是誰?」『魯迅研究百題』長沙・湖南人民出版社1981.11。117-120頁
- 2) 北京・支那研究会編『最新支那官紳録』日本・富山房発売1918.8.20初版未見 / 1919.9.10三版。316頁
- 3) 蕭超然等編著『北京大学校史(1898-1949)(増訂本)』北京大学出版社1988.4。59頁

清末小説から

- 楊聯芬等著、郭志剛主編『二十世紀中国文学期刊与思潮(1897-1949)』南昌・百花洲文藝出版社2006.5 20世紀中国學術論辯書系・文学卷
- 王向遠、陳言著、郭志剛主編『二十世紀中国文学翻譯之爭』南昌・百花洲文藝出版社2006.5 20世紀中国學術論辯書系・文学卷
- 高 峽「中国近代文学における人力車夫表象の不 / 可能性」名古屋大学国際言語文化研究科『多元文化』第7号2007.3
- 王 虹「データから見る清末民初と明治の翻譯文学」名古屋大学国際言語文化研究科『多元文化』第7号2007.3
- 王 国偉『吳趸人小説研究』濟南・齊魯書社2007.1濟南大学古典文学研究叢書
- 錢鍾書著、中島長文訳 林紓の翻譯(下)『颯風』第42号2007.4.15
- 利波雄一 旧派文芸雜誌序言訳叢(3)(『遊戯雜誌』『星期])中国近現代文化研究会編『中国近現代文化研究』第9号2007.3.31
- 松村茂樹 日本における吳昌碩の受容 明

- 治編『中国近現代文化研究』第9号
2007.3.31
- 郭 国昌 第1章啓蒙浪潮中的“文学民衆化”探索『二十世紀中国文学の大衆化之爭』南昌・百花洲文藝出版社2006.12 20世紀中国學術論辯書系・文学卷
- 陳 大康 晚清《新聞報》与小説相關編年(1896-1902)『明清小説研究』2007年第1期(總第83期) 2007発行月日不記
- 慈雲双、伍大福 《中国文学家大辞典・近代卷》“李涵秋”条辨正及其他『明清小説研究』2007年第1期(總第83期) 2007発行月日不記
- 范 伯群 【書評】為轉型期的中国文学史破解疑案 推介樽本照雄的《清末小説研究集稿》『中国現代文学研究叢刊』2007年第3期(總第116期) 月日不記
- 王 富仁 【書評】林紓現象与“文化保守主義” 張俊才教授《林紓評伝》序『中国現代文学研究叢刊』2007年第3期(總第116期) 月日不記
- 許 馨 史料学建設的重要基地 重讀《新文学史料》100期『《新文学史料》百期索引』合肥工業大学出版社2007.3
- 葉 永烈 序：中国科幻小説閃光的起点『中国科幻小説經典』武漢・長江文藝出版社2006.3
- 韓 偉表 『中国近代小説研究史論』濟南・齊魯書社2006.12
- 張 俊才 『叩問現代的消息 中国近代文学專題研究』北京・中国社会科学出版社2006.12
- 周 利荣 文明書局考『出版史料』2007年第2期(新總第22期)2007.6.25
- 李 慶国 試論吳趸人的小説叙述『創立四十周年紀念集 文学部篇』追手門学院大学2007.3.31
- 劉 全福 『翻譯家周作人論』上海外語教育出版社2007.4 外教社翻譯研究叢書
- 嚴 家炎 第5講“五四”小説中的雅俗關係『考辨与析疑 “五四”文学十四講』青島・中国海洋大学出版社2006.10
- 游 秀雲 『王韜小説三書研究』台湾・秀威資訊科技股份有限公司2006.9
- 彭 鏡禧 百年回顧《哈姆雷》『中外文学』第33卷第4期 2004.9
- 文 迎霞 關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者『華東師範大学学報(哲学社会科学版)』第38卷第3期2006.5.15
- 劉 穎慧 李伯元《官場現形記》版權訴訟始末『華東師範大学学報(哲学社会科学版)』第38卷第3期2006.5.15
- 董 智穎 中国近代史上的兩種《女子世界》『華東師範大学学報(哲学社会科学版)』第38卷第3期2006.5.15
- 朱 静 新發現的莎劇《威尼斯商人》中訳本：《剝肉記》『中国翻譯』第26卷第4期2005.7
- 黄 美娥 『重層現代性鏡像 日治時代台湾傳統文人的文化視域与文学想像』台湾・麦田出版、城邦文化事業股份有限公司2004.12
- 柳 和城 新劇小説社与它的出版物『出版史料』2007年第3期(新總第23期)2007.9.25
- 陳 馨 アメリカ人プロテスタント宣教師ワイト女史と『女鐸報』『中国女性史研究』第16号2007.1.28
- 馬長林、楊紅 宗教、家庭、社会 面向女性基督徒的宣教 以《女鐸》、《女

星》、《女青年報》、《婦女》為中心
 陶飛亞編『性別与歷史：近代中国婦女与基督教』上海・世紀出版集團、
 上海人民出版社2006.8

胡 翠娥 『文学翻譯与文化参与 晚清小説翻譯的文化研究』上海外語教育出版社2007.5

郭延礼 『中国文学的變革：由古典走向現代』
 濟南・齊魯書社2007.7

中国近代文学的新風貌
 中国近代文学精神
 中国近代文学的特点
 中国近代翻譯歷程与近代文学翻譯
 中国近代翻譯文学理論
 胡適与中国近代文学研究
 阿英与中国近代文学研究
 中国近代詩歌的新意境和新風采
 鴉片戰爭時期詩歌的主潮：愛国主義
 近代桐城派散文的重新評價
 中国近代小説的出版与研究
 怎樣讀近代小説 以《老殘遊記》為例
 劉熙載的美学思想
 章太炎的文学思想
 《中外小説林》及其理論与創作傾向
 批判与變革：龔自珍的詩歌
 張維屏的詩
 黄遵憲的“民歌情結”及其与詩歌創作的關係
 黄遵憲与中日文化交流
 康有為詩歌中的愛国主義
 陳散原詩文淺說
 秋瑾詩歌的思想与藝術

秋瑾詩歌疑難二題
 走出閨房，步入社会：徐自華的詞
 近代女詞人呂碧城
 吳藻詞中女性的覺醒
 中国文学由古典走向現代的橋梁 關於“中国近代文学史”的教學
 中国文学精神的多元与主流
 人文精神的建構与中国古代文化
 戊戌知識分子的歷史使命感
 明清女性文学的繁榮及其表徵

龔鵬程『近代思潮与人物』
 北京・中華書局2007.4

伝統与反伝統 晚清到五四的文化變遷
 理性与非理性 近代知識分子的理性精神
 鴛鴦蝴蝶派 民初的大眾通俗文学

錢理群、嚴瑞芳主編『我的父輩与北京大学』
 北京大学出版社2006.11

後人心目中的林紓林大文
 陳独秀和他的北大情結吳孟明
 断片的回憶 憶父親錢玄同錢秉雄

(西)塞万提斯(M. D. CERVANTES)著、
 董燕生訳『堂吉訶德』
 武漢・湖北長江出版集團、長江文藝出版社2006.7
 永恒的《堂吉訶德》及其在中国的傳播(訳本前言一)趙振江
 深刻理解 精確翻譯(訳本前言二)...林一安
 呼喚堂吉訶德歸來董燕生

【清末小説研究会の本】

樽本照雄 著

林紓冤罪事件簿

A5判 上製 箱入り 418頁 限定150部 定価：8,400円